『不死身のザイフリート』における
ザイフリート像の特質

石　川　栄　作

徳島大学教養部紀要（外国語・外国文学）第４巻　別刷
１９９３年３月
Journal of Foreign Languages and Literature
College of General Education
University of Tokushima
Volume Ⅳ
March 1993

徳島大学教養部紀要
(外国語・外国文学)
第4巻 1993

『不死身のザイフリート』における ザイフリート像の特質

石 川 栄 作

Zur Eigenschaft der Seyfridgestalt im Hürnen Seyfrid

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Der Hürnen Seyfrid, trotz der sprachlich-formalen Einheitlichkeit inhaltlich eine lose Kompilation, besteht aus drei Erzählpartien: Anfangsteil (1—15), Hauptteil (16—172) und Schlußteil (173—179). In der vorliegenden Arbeit möchte ich jedes Abenteuer Seyfrids in drei Erzählteilen analysieren, um die Eigenschaft der Seyfridgestalt in diesem Werk klarzumachen.

Im Anfangsteil tritt Seyfrid zuerst als ein mutwilliger Knabe auf, dessen Unbändigkeit die königlichen Eltern zuviel verdrießt. Sie lassen ihn nun nach dem Ratschlag der Räte in die Welt reisen, daß er durch das Überwinden von Abenteuern in der Fremde einst ein tüchtiger Held werden könnte. Dieser vorausschauende Ratschlag deutet schon das Thema des Werks an.

Im Hauptteil werden also die gleichen Motivzüge wie im Anfangsteil jeweils gewendet behandelt. Hier wird Seyfrid, der in einem Wald ausgesetzt und von einem Schmied erzogen worden war, beim Drachenkampf nicht als ein unbändiger Jungling, sondern als ein erlösender Held dargestellt. Während der Drachenkampf im Anfangsteil, wie in der traditionellen Sagenüberlieferung, von Seyfrid nur zur Rettung seines eigenen Lebens geführt wird, tritt Seyfrid im Hauptteil freiwillig zur Rettung einer Jungfrau in den Drachenkampf ein: der Drache wird als Teufel vorgestellt, der das Seelenheil der Menschen bedroht. Seyfrid tritt dem Höllendrachen kühn als ein christlicher Erlöserheld und zugleich als ein nach Minne strebender Held entgegen. Seine Handlungen werden sowohl beim vorangehenden Riesenkampf wie auch beim Drachenkampf von der Minne und dem christlichen Gottvertrauen bestimmt. Während im Anfangsteil seine äußere Stärke betont wird, wird im Hauptteil die innere Stärke des Helden hervorgehoben. Durch das Überwinden von den beiden Kämpfen kann er nicht nur den Dienst der Zwerge, sondern auch die Stellung als Schützer in Worms gewinnen.

Gerade das Idealbild als Herrscher verursacht Seyfrids Mord, der am Ende des Hauptteils vom Zwerg Eugel vorausgesagt und dann im Schlußteil von drei Königsbrüdern ausgeführt wird. Während im Anfangsteil Seyfrids Tod mit dem Hortgewinnung verbindet ist, spielt der Hort hier aber keine wichtige Rolle: Seyfrid sinkt den Hort in den Rhein. Der Hauptteil und der Schlußteil stehen sicherlich in der gewendeten Beziehung mit dem Anfangsteil.

Daraus sich ergibt, daß der Hauptteil des Hürnen Seyfrid in einem bewußten Gegensatz zum traditionellen Anfangsteil geschaffen worden ist. Das Heldentum, das im Anfangsteil in negativer Weise dargestellt ist, wird im Hauptteil in das neuartige Ideal des sozial handelnden Helden überführt. Das Thema des Werks lautet gerade Seyfrids Entwicklung vom mutwilligen Knaben (Anfangsteil) durch den Erlöserheld (Hauptteil) zum Herrscher (Schlußteil). Insofern sind die drei Erzählpartien vereinigt. Zwar findet man überall in ganzem Werk Widersprüche, aber gelingt es

vielmehr dem Dichter, im Hauptteil die neuartige Seyfridgestalt als ein Erlöserheld zu entfalten, indem er hauptsächlich im Anfangsteil und Schlußteil die traditionellen Sagenstoffe benutzt und im ganzen überall die Widersprüche auffällig machen läßt. Die Eigenschaft dieses spätmittelalterlichen Aventiurenromans besteht gerade in der Zusammensetzung und der Spannung von den alten und neuen Sagenstoffen.

序

ニーベルンゲン伝説は五、六世紀の民族移動時代にライン河畔フランケンの領土を発祥地として歌謡の形式で生じたものである。その伝説は、その後ドイツにおいてはいくつかの段階を経て、十二世紀半ばには叙事詩の形式でさらに発展していったものと推定される[1]が、それらの伝説相はもちろん文字の形では遺されていない。北欧においてはエッダやサガの中で数多くのニーベルンゲン伝説が伝承されているのに対して、ドイツでの伝承事情はきわめて悪いと言わねばならない。ドイツにおけるニーベルンゲン伝承として文字の形で現在の我々に伝えられているのは、十三世紀初頭の『ニーベルンゲンの歌』とその後日譚『哀歌』以外には、本稿で取り扱う十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』(Der Hürnen Seyfrid)[2]ただ一つを数えるに過ぎないのである。それだけにこの韻文『不死身のザイフリート』は貴重な遺産であるが、さらにこの作品はニーベルンゲン伝説の不死身の英雄ジークフリート（Siegfried）を唯一の主人公として、その英雄の冒険を取り扱っている点においても存在価値が高いと言える。全部で197詩節の韻文から成るこの作品には、第1詩節の前に6行の前口上（Gesangsweiß）が付け加えられていて、次のように語り始められている[3]。

Hierinn findet jr ein schönes Lied
Von dem Hürnen Seyfrid,
Vnd ist in des Hiltebrandes thon.
Deßgleychen jch nie gehört han.
Vnd wenn jr das leßt recht vnd eben,
So werdt jr mir gewunnen geben.

1）Vgl. Andreas HEUSLER: Nibelungensage und Nibelungenlied. Dortmund 1921. 因みに、ホイスラーの発展段階説については拙著：『ニーベルンゲンの歌』――構成と内容――（郁文堂1992年）の第二章において詳しく紹介しているので、参照のこと。

2）現存する最古の印刷は1530年頃のもので、最新の印刷は1642年のものである。(Vgl. Werner HOFFMANN: Mittelhochdeutsche Heldendichtung. Erich Schmidt Verlag Berlin 1974. S. 96.) なお、この韻文を種本として十七世紀には民衆本『不死身のジークフリート』も生まれている。

3）『不死身のザイフリート』のテクストは次のものを使用する。後者は前者の再録である。なお、邦訳は拙訳を試みる。

Friedrich Heinrich von der HAGEN／Alois PRIMISSER (Hrsg.): Der Helden Buch in der Ursprache. Zweiter Theil. Bei G. Reimer Berlin 1825.

Paul PIPER (Bearbeitet): Die Nibelungen. Erster Teil. In: National-Litteratur von Joseph KÜRSCHNER. 6. Band. Union Deutsche Verlagsgesellschaft Stuttgart 1889.

ここに見られるのは、不死身のザイフリート
についてのすばらしき歌で、
ヒルテブラントの歌の調べで書かれたもの。
このようなものを私はほかに聞いたことがない。
この歌をともかくもお読み下されば、
私の申すことがお分かりいただけよう。

この前口上からも明らかなように、以下で語られる「すばらしき歌」(ein schönes Lied) の中心に据えられているのは、『ニーベルンゲンの歌』のジーフリト (Sîfrit) にあたる不死身の英雄ザイフリート (Seyfrid) である。十三世紀初頭の『ニーベルンゲンの歌』の詩人は、ジーフリトの財宝獲得や竜退治については単にハゲネの報告という形で第3歌章 (86－101) に挿入している[4]だけで、興味はむしろジーフリトの妻クリエムヒルト (Kriemhilt) の方にあるのに対して、『不死身のザイフリート』の詩人の関心はもっぱらザイフリートの冒険に向けられている。クリームヒルト (Krimhilt) という女性はこの作品ではたいてい「乙女」(die Junckfraw) という名詞に、例えば「立派な」(here, 118,2)、「愛らしい」(minnigklich, 122,2) そして「純粋な」(reyn, 109,3；152,2) などの形容詞が添えられて表現されており、そのクリームヒルトという名前は第51詩節の一箇所でしか挙げられていないことからもそれは明らかであろう。『ニーベルンゲンの歌』の詩人が極力締め出している不死身のザイフリートの冒険を真正面から捉えて語っている点で、この作品は『歌謡エッダ』における『シグルズの歌』や『ヴォルスンガ・サガ』あるいは『ティードレクス・サガ』等とともにジークフリート伝説の貴重な遺産の一つに数えられうるものである。

ところが、この『不死身のザイフリート』という作品は言語・形式的には統一されているものの、内容的には締まりのない編集を示しており[5]、物語全体は冒頭部分 (1－15詩節)、主要部分 (16－172詩節) そして結末部分 (173－179詩節) の三つに区分されるのが一般的である[6]。この三つの部分で語られている物語内容は互いに矛盾を示しているばかりではなく、それぞれの部分における筋の展開にも多くのいわば「裂け目」があり、主人公ザイフリート自身の人物像についてもさまざまな矛盾が見出されるのである。一体、この作品において詩人あるいは改作者はザイフリートをどのような人物として描こうとしたのであろうか。この作品の至るところに見られる

4)『ニーベルンゲンの歌』の詩節番号は Helmut de BOOR (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20.Auflage. F.A. Brockhaus Wiesbaden 1972. に従う。なお、以下において邦訳は相良守峯訳 (岩波文庫) を引用するが、論述の都合から表現を若干変えるところもある。

5) Vgl. Andreas HEUSLER: Lied und Epos in germanischer Sagendichtung. Druck und Verlag von Fr. Wilh. Ruhfus Dortmund 1905. S. 21.

6) Vgl. Volker-Jeske KREYHER: Der Hürnen Seyfrid. Die Deutung der Siegfriedgestalt im Spätmittelalter. Peter Lang Frankfurt am Main 1986. S. 19.　なお、本稿はこの研究書に負うところが多いことを付記しておく。

「裂け目」や「矛盾」は単なる素材の編集から生じたものなのか、それともそこには特別に何か意味が込められているのだろうか。この作品のテーマは一体何なのであろうか。本稿では、北欧に伝承されたエッダやサガ及びオーストリア地方で成立した『ニーベルンゲンの歌』などと絶えず比較しながら、この作品の三つの物語部分におけるザイフリートの冒険を一つ一つ分析することによって、この作品におけるザイフリート像の特質を探り出し、この作品の特質を明らかにすることにしよう。

Ⅰ．冒頭部分（1－15詩節）におけるザイフリート像

この作品がニーベルンゲン伝説中の英雄ジークフリート、すなわち、ザイフリートを唯一の主人公として、その冒険を取り扱った物語であることは、序で挙げた前口上の記述からばかりではなく、冒頭部分の第1詩節で詩人の意図が次のように明示されていることからも明らかである。

Es saß im Niderlande　　Ein Künig sowol bekandt
Mit grosser macht vnd gewalte,　　Sigmund was er genant,
Der hett mit seyner frawen　　Ein sun, der hieß Seyfrid,
Des wesen werdt jr hören　　Alhie in disem Lied.　　(1)

ニーデルラントの国に名高き国王が君臨していた。
強大な権力を誇り、名をジグムントといった。
国王と妃の間には息子が一人いて、ザイフリートといった。
この人物についてこの歌の中でお聞かせいたそう。

詩人はこのようにはっきりとザイフリートを作品の中心に据え、物語の筋をこの人物から展開させる意図を明らかにしているのである。『不死身のザイフリート』の詩人は、『ニーベルンゲンの歌』と同じように、まずザイフリートをニーデルラントの名高き国王ジグムント[7]の王子として登場させている。ところが、『ニーベルンゲンの歌』では王子ジーフリトは「身分にふさわしく懇篤な教育を受け」(23,1)、「警護を連れずに、外出することは許されなかった」(25,1) ほど大切に育て上げられたのに対して、『不死身のザイフリート』では逆に王子ザイフリートは全く両親の手に負えない腕白者として描かれている。続く第2詩節ではすなわち次のように語られているのである。

7）『ニーベルンゲンの歌』では父はジゲムント（Sigemunt, 20, 2）と綴り、母の名はジゲリント（Sigelint, 20, 2）である。なお、『不死身のザイフリート』においてザイフリートの母の名ジグリンゲ（Siglinge）は第48詩節で挙げられている。

Der knab was so můtwillig,　　Darzů starck vnd auch groß,
Das seyn vatter vnd můter　　Der ding gar seer verdroß.
Er wolt nie keynem menschen　　Seyn tag sein vnderthon.
Im stund seyn synn vnd můte,　　Das er nur züg daruon.　（2）

この少年はとても腕白で、その上強くて大きくもあったので、
父と母はそのことで大変嫌な思いをした。
彼は日頃どんな人にも断じて従わなかったのである。
彼にはそこから出かけてみたいという意志と勇気があった。

「腕白」(můtwillig) であったという点で、このザイフリートは『ティードレクス・サガ』のジグルト (Sigurd) [8] に相応する。ところが、『不死身のザイフリート』におけるザイフリートは「腕白」ゆえに故国から旅立つことになったのに対して、『ティードレクス・サガ』のジグルトは故国を離れて成長したがゆえに「腕白」となった[9] 点で著しいコントラストをなしている。すなわち、『ティードレクス・サガ』のジグルトはシュヴァーベンの森で母の胎内から生まれ出るや否や、いわば偶発的にガラス容器に乗って川を下って海へ流れ出たあと、引き潮でもってある陸に辿り着き、そこで一匹の雌鹿に助けられて、一年間その乳を飲んで生長する。その後、ミーメという鍛冶屋に拾われて十二歳になるまで養育されるが、ジグルトはとても乱暴な少年となり、ミーメの下僕をぶちのめしたので、誰もそれに耐えられなかったのである。『ティードレクス・サガ』のジグルトはこのように自らの意志ではなく、いわば外的な力によって故国を離れなければならなかったのに対して、『不死身のザイフリート』の主人公は逆に自ら進んで故国から旅に出たいという意志を抱いていた点で本質的に異なる。ザイフリートは国王の後継者として生まれついた社会的拘束から逃げ出し、独立的に自らの運命を決めようとしているのである。このようにザイフリートは非常に始末に負えないほど、勝手気儘に振舞っているので、両親はもはやなす術をも知らずに顧問官たちに相談するのである。

Do sprachen des Künigs Räthe　　》Nun last in ziehen hyn,
So er nicht bleyben wille.　　Das ist der beste syn.
Vnd last in etwas nieten,　　So wirdt er bendig zwar.
Er wirdt ein Held vil küne　　Vnd lebt er etlich Jar.《　（3）

8）『ティードレクス・サガ』ではジグルトの父はタルルンゲン国 (Tarlungen) ―― カルルンゲン (Carlungen) の書き間違いと推定される ―― のジグムント王 (Sigmund) で、母はヒスパニア (Hispania) のニードゥング王 (Nidung) の娘ジジベ (Sisibe) である。

9）Vgl. Fine ERICHSEN: Die Geschichte Thidreks von Bern (Thule 22. Band) Eugen Diederichs Verlag Jena 1924. S. 210-222. なお、この部分については拙著：前掲書41－4頁にまとめているので、参照のこと。

そこで国王の顧問官たちが言った。「彼がとどまりたくないなら、
彼に旅立ちをさせなさい。それが最上の考えです。
彼に何かをやらせるのです。そうすれば彼はおとなしくなるでしょう。
何年かしたら、彼は大変勇敢な英雄となりましょう。」

顧問官たちの考えによれば、要するに、旅の途上で襲いかかってくる幾多の困難を克服することによって、勝手気儘な王子もやがて「おとなしく」(bendig, 3,3) なり、「大変勇敢な英雄」(ein Held vil küne, 3,4) にも成長するであろうというのである。この点で『ティードレクス・サガ』とは全く異なった故郷からの出立であるが、ともかくもこの先見の明のある顧問官たちの忠告によって、自己中心的なザイフリートの旅立ちはより高い意味を持つに至ったのである。

こうして少年ザイフリートは自分の国を立ち去って、ある森の前の一つの村に到着すると、鍛冶屋に仕えようとする (4,1-3) が、ここでも少年は旅立ち前と同じ「腕白」という本性を表わしたままである。すなわち、少年は鉄を真っ二つに切って、金敷を地面の中にめり込ませる (5,1) ばかりではなく、そのことで咎められると、教えを受け入れることもせず (5,2) に、逆に徒弟や親方を打ちのめす (5,3) のである。ザイフリートは鍛冶屋に仕えよう (4,3-4) という意志を持ってはいても、その手仕事に適合し順応することはできないのである。教えを施しても逆に乱暴を受けるばかりなので、鍛冶屋の親方は、どうしたらその少年を片づけることができるかと思案をめぐらす (5,4)。森の中の菩提樹のそばにはいつも恐ろしい竜が棲んでいた (6,1) ので、親方はその竜に少年を片づけさせることにした。そこで名目として親方は炭を買って来るようにと、少年を森の中の炭焼きのところに遣わせるのである (6,3-4)。ところが、親方の企ては思い通りにはいかない。

Damit so meynt der Schmide, Der wurm solt in ab thon.
Als er kam zů der Linden, Den wurm that er beston.
Er thet in bald erschlagen, Der junge, küne man.
Do dacht er an den Koler, Zů dem gieng er in den than. (7)

それでもって鍛冶屋は、竜が少年を片づけてくれるものと思った。
ところが少年は菩提樹のところに着くと、竜を襲った。
若い勇敢な男はすぐに竜を打ち殺したのである。
そこで少年は炭焼きのことを思い出して、森の中へ入って行った。

ザイフリートは、すなわち、持ち前のものすごい力でもってすぐさま竜を打ち倒してしまうのである。腕白で乱暴な少年の処置に困り果てた鍛冶屋の親方が、森の中の竜に少年を片づけさせよ

うとしたものの、逆に少年が竜を倒してしまうという筋の展開は、細かな相違はあれ、基本的には『ティードレクス・サガ』のそれに相応する。いずれの場合にもそのザイフリートの腕白で乱暴な力は竜との戦いで初めてその本来の目的を見出したのである。なるほど『不死身のザイフリート』ではその竜を倒したのち、『ティードレクス・サガ』とは若干異なって、なおも多くの怪獣との戦いが繰り広げられるのであるが、しかし、その場面でもザイフリートの恐れを知らない勇敢な力が発揮されている。

Do kam er in ein gwilde,　　Da so vil Trachen lagen,
Lindtwürm, Krötten vnd Attern,　　Als er bey seynen tagen
Het ye gesehen ligen,　　Zwischen bergen in eym thal.
Da trůg er zam die baumen,　　Ryß die auß vberal.　（8）

Die warf er auff die würme,　　Das keyner auff mocht farn,
Das sie all musten bleyben,　　Als vil als jr da warn.
Da lieff er hin zum Koler,　　Da fand er fewr bey jm,
Das holtz thet er an zünden　　Vnd ließ die würm verbrinn.　（9）

彼はある森の中へ入って行った。その山間（やまあい）の谷間には、
彼がこれまでまだ見たこともないような、
悪竜やガマや毒蛇といった多くの怪獣が棲んでいた。
そこで彼は木々を、至るところで引き抜いては、寄せ集めた。

その木々を彼が怪獣どもに投げつけると、どれも逃げ出すことはできず、
そこにいたすべての怪獣は皆そこに足留めされてしまった。
そこで彼は炭焼きのところに出かけて、そこで火を見つけると、
薪に火をつけて、怪獣を焼いてしまった。

『不死身のザイフリート』においてはこのように悪竜退治が二度繰り返されることになっているが、この悪竜退治のいわば二重化は、ニーベルンゲン伝説中のよく知られた伝統的な特徴から逸脱したものと考える必要はない。なぜなら、ここで語られている怪獣どもがその性質から言って個々に異なるものであるにしても、それらはやはりその基本的特質において、ニーベルンゲン伝説において伝統的に現われているように、這うものであって毒を吐くものという竜の観念に相応する[10] からである。この作品における悪竜退治の繰り返しはザイフリートの野性的な力の強さ

10) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 47.

を明示することに役立っていると言えるのである。そしてこれらの多くの怪獣の角質層から『不死身のザイフリート』の主人公もまた、伝統的なニーベルンゲン伝説とほぼ同じように、不死身の英雄というさらに強い存在へと変身するのである。その場面は『不死身のザイフリート』では次のように語られている。

Das horn der würm gund weychen, Ein bechlein her thet fließ.
Des wundert Seyfrid sere, Ein finger er dreyn stieß.
Do jm der finger erkalte, Do was er jm hürneyn.
Wol mit demselben bache Schmirt er den leybe seyn, (10)

Das er ward aller hürnen, Dann zwischen den schultern nit,
Vnd an der selben statte Er seynen tode lidt,
Als jr inn andern dichten Hernach werdt hören wol.
Er zoch an Küng Gybichs hoffe Vnd was auch manheyt vol. (11)

怪獣どもの角質は柔らかくなって、小川となって流れ出た。
これにザイフリートは大変驚いて、一本の指をその中に浸した。
その指が冷えると、それは角質となっていた。
この小川に彼は身体をたっぷりと浸すと、

彼はすっかり角質となったが、そのとき両肩の間だけはそうならなかった。
まさにこの箇所のせいで彼は命を失うことになるが、
このことについてはほかの所でのちにお聞かせいたそう。
彼はギービッヒ王の宮廷へ行ったが、勇敢な心にも満ち溢れていた。

ザイフリートが柔らかくなった怪獣の角質の中に身体を浸すと、彼の身体もすっかり角質となったが、そのとき両肩の間だけはそうならなかったという描写は、個々の違いはあるにせよ、『ニーベルンゲンの歌』や『ティードレクス・サガ』の描写に相応する。いずれの作品においてもこの両肩の箇所のせいでザイフリートはのちに命を失うことになるのである。角質化はこのように強力な身体と同時に人間の脆い死という運命とも結びついているのであるが、しかし、この角質化によって特にこの作品においてはザイフリートは内面的にも変化したと言えるであろう。なぜなら、上記引用の第11詩節4行目の記述からも明らかなように、今やギービッヒ王の宮廷に出かけるザイフリートは、「腕白」ではなく、「勇敢な心」(manheyt)に満ち溢れているからである。ザイフリートはもはや、故国を去る前や鍛冶屋での仕事のときのように共同社会に順応できない、始末

に負えない少年ではない。先見の明のある顧問官たちの助言(3)によってほのめかされていたように、今や内面的な変化がザイフリートの中に起こったに違いないのである[11]。ザイフリートは、ギービッヒ王の娘に求婚するために、自ら進んで国王に奉仕する心構えがあるほどに自らのわがままを制することができるようになった[12]のであり、そのことは次のように語られている。

Er dienet willigklichen　　Dem Künig seyn tochter ab,
Vnd das der Künig Gybich　　Im die zum weybe gab.
Die het er wol acht Jare.　　Nun hört, was da ergieng,
Ee sie jm ward zů thayle,　　Was wunders er anfieng.　　(12)

彼はその娘を得るため国王に喜んで仕えたところ、
ギービッヒ王は娘を彼に妻として与えた。
彼は妻と八年暮らした。彼女が彼のものとなるまでに、
何が起こったか、どんなことを彼が為したかを、さてお聞き下され。

『不死身のザイフリート』における主人公は、今や『ニーベルンゲンの歌』のジーフリト[13]と同じように、自ら進んで婦人奉仕(abdienen, 12,1)に勤めるのである。「彼女が彼のものとなるまでに、何が起こったか、どんなことを彼が為したか」(12,3-4)という表現の中には、第16詩節から始まる主要部分におけるザイフリートのクリームヒルト救出行為が暗示されていると解してもよいであろう。ザイフリートのこれまでの悪竜との戦いはただ単に自分自身を守るための戦いに過ぎなかったが、今やザイフリートは弱者にも手を差し延べる救出者でもあるのである。そしてその救出行為の結果実現した姫との結婚によって彼は共同社会における彼の社会的地位をも堅固にすることができるのである。しかし、この新たに得られた社会的地位もまた、「彼は妻と八年暮らした」(12,3)という表現によってすぐさま再びザイフリートののちの死と結びついているが、この宿命もまた伝統的なニーベルンゲン伝説に相応するものである。

上述の第12詩節はそのまま第16詩節から始まる主要部分に続くものと考えることもできるが、その前に財宝に関する次の三詩節が挿入されている。

Nun mügt jr hören gerne:　　Wie der Nyblinger hort
Gefunden ward so reyche　　Bey keynem Kayser fort,

11) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 58.
12) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 58.
13)『ニーベルンゲンの歌』においてジーフリトがクリエムヒルトのミンネを求めて仕える騎士であることは、例えば333, 388, 536詩節等からも容易に読み取られる。

Den fand Seyfrid der küne Bey eyner staynen wandt,
Den het ein Zwerg verschlossen, Der was Nybling genant. (13)

Do den gezwerg Nyblinge Im berg der todt vertryb,
Er ließ drey sün vil junge, Den was der schatz auch lieb.
Sie sassen in dem berge, Hütten Nyblinges hort,
Darumb sich von den Hewnen Hůb jämmerlicher mordt. (14)

An manchem Held vil küne, Die da wurden erschlagen
Wol in den herten streyten, Als jr noch hörend sagen.
Das niemand kam daruone, Das thů jch euch bekandt,
Wan Dieterich von Berne Vnd meyster Hiltebrandt. (15)

さて、お聞きになりたいでしょう。どんな国王も
見つけたことのないような、たくさんのニープリンクの財宝を
勇敢なザイフリートがいかにしてある岩壁のところで見つけたかを。
その財宝はニープリンクという名の侏儒(こびと)が隠していたものである。

侏儒ニープリンクが山中で死に襲われたとき、
彼は大変若い三人の息子をあとに残したが、彼らにも財宝は気に入っていた。
彼らは山中で暮らし、ニープリンクの財宝を守った。
そのためフン族によって悲惨な殺戮(さつりく)が起こったのである。

お聞きになっているように、大変勇敢な多くの英雄が
激しい戦いにおいて打ち殺された。
お知らせしておくが、ベルネのディエトリーヒと
師匠ヒルテブラント以外は誰もそれから逃れられなかったのである。

この財宝獲得は時間的に言ってギービッヒ王の姫への求婚以前に起こるべきもので、たいていのニーベルンゲン伝説では竜退治のあと、角質の身体となってからの冒険に属するものである。いずれにしてもザイフリートによるこのニープリンクの財宝獲得はニーベルンゲン伝説においてなくてはならない冒険の一つである。ただこの作品では特別に冒頭部分の最後に置かれているのは、その財宝獲得がザイフリート一個人の死ばかりではなく、否、どちらかと言えばむしろのちのフン族の国でのニーベルンゲン族の破滅の方により強く結びつけられているからであろう。ニープ

リンクの「財宝」(hort, 14,3) は韻によってフン族による悲惨な「殺戮」(mordt, 14,4) と関連づけられている[14] ことからもそれは明らかである。財宝はそれを所有し、それを得ようと努める者には死をもたらすというニーベルンゲン伝説に特有の財宝の呪いが、『不死身のザイフリート』においてもこの場面で保存されているのである。

以上、『不死身のザイフリート』の冒頭部分 (1－15) を分析してきたことから明らかに言えることは、この冒頭部分はザイフリートの冒険については、ブリュンヒルトに関わる出来事は例外として、大雑把ながらほとんどすべての出来事を取り扱っているということである。生い立ちと故国からの旅立ちに始まって、鍛冶屋での奉公、悪竜退治、身体の角質化、両肩間の傷つく急所、ニーブリンクの財宝獲得、ギービッヒ家での滞在、クリームヒルトとの結婚そして暗殺、さらにはその暗殺に起因するフン族によるニーベルンゲン族の殺戮に至るまで、ほとんどすべての出来事がわずか15詩節のうちに網羅されているのである。これらのうちたいていのものは『ニーベルンゲンの歌』においてもわずかに何らかの形で伝承されているが、鍛冶屋での奉公に関する部分は『ニーベルンゲンの歌』には全く見出されないものであり、『不死身のザイフリート』はかなり古いニーベルンゲン伝説の素材を含んでいることが理解できよう。それは単なる古い素材の並列的な列挙のように見えながら、しかしその古い素材的要素の列挙の中には主人公ザイフリートの発展的な成長過程もまた同時に盛り込まれていることが以上の分析から明らかである。第16詩節から始まるこの作品の主要部分においてはまさにこのザイフリートの成長過程が幾多の困難な冒険を通して細かに描かれてゆくのである。その意味においてこの冒頭部分は主人公ザイフリートの成長過程を描く主要部分のいわば「プロローグ」のような役割を果たしていると言えるのである。

Ⅱ. 主要部分 (16－172詩節) におけるザイフリート像

1. クリームヒルトの誘拐 ――― ザイフリートと侏儒オイゲルの出会い ―――

『不死身のザイフリート』の冒頭部分(1－15)は主要部分(16－172)のいわば「プロローグ」であり、第12詩節はそのままこの主要部分の第16詩節に続くものであることを上で確認してきたが、しかし、主要部分は冒頭部分とはさまざまな点で著しい矛盾を示しており、独立的に生じた物語であるかのような様相を呈している。叙述方法から言っても、冒頭部分が「歌謡」(Lied) の体裁をとっているのに対して、この主要部分は「叙事詩」(Epos) の体裁で語られていることは、アンドレアス・ホイスラーも指摘している[15] 通りである。従って、冒頭部分と主要部分はゆるく結びつきながら、第16詩節から再び新たにザイフリートの物語が語り始められていると言ってもよいであろう。すでに冒頭部分で報告された人物たちがともかくも再度あらすじの中に導入されるのである。

14) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 63.
15) Vgl. A. HEUSLER: Lied und Epos in germanischer Sagendichtung. S. 21.

Ein Stadt leyt bey dem Reyne, Dieselb ist Wurms genant,
Darinn da was gesessen Ein Künig, Gybich gnant.
Der het mit seyner frawen Drey sün so hoch geporn,
Ein tochter, durch die warde Manch küner Held verlorn. (16)

ライン河のほとりにウォルムスと呼ばれた町があった。
そこに暮らしていたのは、ギービッヒという名の国王である。
国王は妃との間に気高い三人の息子と一人の娘を儲けたが、
この娘のためには多くの勇敢な英雄の命が失われたのである。

まず新たに紹介されるのはライン河畔ウォルムスのギービッヒ王家であり、4行目の記述によって、なかでもギービッヒ王の娘が際立たされている。以下の物語の展開にはまさにこのギービッヒ王の娘が関与していることが明らかである。事実、この美しい姫がある昼に窓辺に立っていると、そこへ荒々しい竜が空から飛んで来て、姫を奪い去った（17,2-4）ことから、この主要部分の物語が展開してゆくのである。竜は乙女を山中のある岩の上に連れ去って（19,1）、そこで四年間も彼女を捕らえたまま（20,1）、彼女の膝に頭をのせたりして（21,1）暮らしている。この竜はもともとは一人の美しい若者であったが、ある女性の呪いによって竜の姿に変えられている（vgl. 125,3-4）のであり、五年後には魔法が解けて人間に戻ることになっている（26,3）。人間に戻ったら、竜はこの乙女を妻にしようと思っている（26,4；27,2）のである。一方、ギービッヒ王はありとあらゆる国へ使者を送ってこの美しい娘を捜し続けている（32,1-2）。遠いありとあらゆる国々の中でのこととあって、それは大変な苦労であった（32,3）が、ついに一人の優れた勇士が彼女を竜の岩から救い出すことになる（32,4）のである。その優れた勇士がザイフリートであることは言うまでもない。ザイフリートは第33詩節において改めて次のように紹介されて登場するのである。

Do was zů den gezeyten Ein stoltzer Jüngeling,
Der was Seyfrid geheyssen, Eyns reychen Künigs kind.
Der pflag so grosser stercke, Das er die Löwen fieng
Vnd sie dann zů gespötte Hoch an die baumen hieng. (33)

その当時、一人の堂々とした若者がいた。
彼はザイフリートと呼ばれ、ある裕福な王の息子であった。
彼はものすごい力を持っていたので、獅子をつかまえては、
それらをそのあと高い木に吊り上げて、おもしろがっていた。

ザイフリートは「ある裕福な国王の息子」(33,2) であり、かつ百獣の王である獅子をいとも簡単にとらえて楽しむほどの「ものすごい力」(33,3) を持ち合わせていたというこの描写は、ザイフリートがこれからギービッヒ王の気高い娘を悪竜の手から救い出すのに十分耐えられうる勇敢な若者であるということをほのめかしている。しかし、この時点でこの若者ザイフリートがギービッヒ王の送り出した使者の一人であったか否かは不明であると言わざるをえない。なぜなら、ザイフリートが悪竜の棲む陰気な森に辿り着いたのは偶然の出来事として描かれているからである。すなわち、大人に成長したザイフリートがある朝、狩りのために森に出かけて行った (34, 1-2) ときのこと、彼はそこで偶然不思議な足跡を見つける (35,3) と、飲まず食わずで四日間もその足跡をつけて行き (36)、ついにはその悪竜の棲む陰気な森の中に迷い込んでしまうのである。道に迷って「どうしてここへやって来たのか」(Was hab ich her gewagt? 37,3) とザイフリートが嘆く場面で、詩人自身もその直後に付け加えて「彼は国王の娘を慰めるすべをまだ知らなかった」(Er west noch nicht zů troste／ Der Kayserlichen magdt. 37,4) と語っている。ザイフリートがギービッヒ王の娘の誘拐された事情について聞き知るのは、その陰気な森の中でそのあと偶然出会った侏儒(こびと)王オイゲル――オイグライネ (Eugleyne, 42,3；45,1) とも呼ばれている――からである。この》Eugel《あるいは》Eugleyne《という名称は中高ドイツ語の》ouge《(目) の縮小名詞》öugel《あるいは》öugelîn《にあたるものである[16] が、要するに、オイゲルは特に光る超人的な目、すなわち、妖精的で魔法的で神秘的な目を持ち合わせた侏儒として登場しており、この主要部分の物語の展開にはなくてはならない重要な存在である。まさにこの侏儒オイゲルから初めてザイフリートはギービッヒ王の娘クリームヒルトが悪竜に誘拐されたことを聞き知るのである。否、それどころか、その前にザイフリートはこの侏儒オイゲルから自分自身の生い立ちについても聞き知ることになるのである。その場面は次のように語られている。

》Nun danck dir Got《, sprach Seyfrid　　》Vnd du vil kleyner man,
Deyner tugent vnd trewe　　Solt mich geniessen lan,
Seyd das du mich erkennest,　　Wie hieß der vatter meyn,
Jch bitt das du jn nennest,　　Vnd auch die můter meyn.《　(46)

Nun was der Held Seyfride　　Gewesen seyne Jar,
Das er vmb vatter vnd můter　　Nicht west als vmb ein har.
Er ward wol ferr versendet　　Inn eynen finstern than,
Darinn zoch jn ein meyster　　Biß er ward zů eym man.　(47)

16) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 118f. und auch Matthias LEXERs mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. S. Hirzel Verlag Stuttgart. 1972. S.156.

Er gwan vier vnd zwentzig stercke Vnd negklich sterck ein man.
Do sprach zů jm das Zwerge 》Will dir zů wissen thon:
Deyn můter hieß Siglinge Vnd was von Adel geporn,
Deyn vatter Künig Sigmund, Von den so bist du wordn.《 (48)

「神の感謝がありますよう」ザイフリートは言った、「小さな人よ、
君の高潔な誠実を私に与えてくれ給え。
君は私を知っているのだから、私の父は何というのか、
また母の名前をも言ってくれるよう、お願いする。」

ところで英雄ザイフリートは、これまでの生涯の間、
父と母については全く何も知らないままであった。
彼は遠く、ある陰気な森の中へ捨てられて、
そこで大人になるまである親方に育てられたのである。

彼は二十四人分の力を持ち、あらゆる強さを具えた男であった。
その彼に向かって侏儒が言った。「君に教えてあげよう。
君の母はジグリンゲといって、高貴な生まれで、
父はジグムント王といい、二人の間に君は生まれたのだ。」

この三詩節は冒頭部分と主要部分との物語関係を根底から壊してしまっている。なるほどザイフリートはジグムント王の息子であり、高貴な王家に生まれついているという点では冒頭部分の描写（1,1-3）に相応するが、しかし、「彼は遠く、ある陰気な森の中へ捨てられて、そこで大人になるまである親方に育てられた」（47,3-4）という点では全く矛盾するのである。この矛盾は一体何を意味しているのであろうか。この作品の至るところに見出される矛盾から推測してここで言えることは、『不死身のザイフリート』の詩人はこのような矛盾にはあまり頓着していないということであろう。程度の差こそあれ、このような矛盾は『ニーベルンゲンの歌』にも見出され、例えば、「警護をつれずに、外出することは許されなかった」（25,1）はずの王子ジーフリトは、その背後では「その雄心にかられて、あまたの国に征旅をこころみ」（21,2）、「ニーベルンゲンの武士七百名をも征服して」（94,4）、「宝の持主となった」（97,4）のみならず、「ある時は竜をも退治して」（100,2）、「その血を全身に浴びて、肌が不死身の甲羅と化した」（100,2-3）という英雄でもあるのである。これはいくつかの素材が重なり合った結果であると解釈できるが、まさにこのことがこの『不死身のザイフリート』にもあてはまるのではないだろうか。生まれてすぐに森の中へ捨てられ、鍛冶屋の親方のもとで成長し、大人になってからようやく自分が王家の出身で

あることを知るという筋立は、すでに上でも述べたように細かな相違はあれ、『ティードレクス・サガ』にも見出されるものである。従って、『不死身のザイフリート』の主要部分におけるこの場面はジークフリート伝説のよく知られた古い伝承の一つに容易に数え入れられるものでもあるのである。この古い素材の挿入によってザイフリートは、冒頭部分と同じように、悪竜と戦うのに十分耐えられうる力（vgl. 48,1）を具えた勇士であることがここで再度明示されているのである。ところが、冒頭部分ではその悪竜との戦いは単に自分自身の命を守るための戦いに過ぎなかったのに対して、主要部分においては他人を救い出すための戦いとなっていることに注目しなければならない。この主要部分における悪竜との戦いは冒頭部分のそれとは意識的に異なるものとして展開され始めようとしているのであり、その新しい特徴を決定づけているのが侏儒オイゲルの説明である。オイゲルは、すなわち、ザイフリートの生い立ちを語るだけではなく、クリームヒルトの誘拐についてもその事情を次のように説明するのである。

》Du solt von hynnen keren,　Seyfrid, du werder man,
Vnd thůst du das nicht balde,　Deyn leben must du lan.
Auff dem stayn ist gesessen　Ein Trach, wont da hie vorn,
Vnd wirdt er deyn hie innen,　Deyn leyb hast du verlorn.　(49)

Es wont auff disem stayne　Die aller schönste magdt,
Das wiß auch sicherlichen,　Vnd sey dir hie gesagt,
Sie ist von Christen leuten,　Eyns Künigs tochter her.
On Gottes erbarmunge　Wirdts erlößt nymmer mer.　(50)

Ir vatter der heyst Gybich　Vnd sitzet bey dem Reyn,
Krimhilt heyst die Künigin　Vnd ist die tochter seyn.《　(51,1-2)

「ザイフリート、気高い男よ、君はここから立ち去るがよい。
すぐにそうしないなら、君は命を失わねばなるまい。
ここの前方にある岩の上には竜が棲んでいるのだ。
君がここにいるのが竜に分かれば、君は命を失うことになるだろう。

この岩の上にはきわめて美しい乙女が暮らしている。
そのこともしかと知っておくがよい。そしてここで君に言っておくが、
彼女はキリスト教徒で、ある国王の立派な姫なのだ。
神のあわれみがなければ、彼女は決して救出されないのだ。

彼女の父はギービッヒといい、ライン河畔に君臨している。
姫の名はクリームヒルトで、彼の娘なのだ。」

このオイゲルの説明によって、主要部分で展開される竜との戦いは乙女クリームヒルトを救い出すための戦いとなったのである。ニーベルンゲン伝説で古来語り継がれてきた不死身の英雄ザイフリートはここでは他人のために戦う救出者として登場しているのである。クリームヒルトがここで特に「キリスト教徒」(50,3) であると侏儒オイゲルによって紹介されているのも決して意味のないことではあるまい。ザイフリートは、救い出す相手がキリスト教徒であることによって、今や弱者を救い出すキリスト教的騎士としての性格が強調されているのである。一方、竜はこのザイフリートとコントラストをなすように、保護なき乙女の至福を脅かす悪魔の具現として描かれている。竜は五年後に人間に戻ったら、乙女を自分の妻にしようと思っているので、乙女を捕らえているこの岩に近づこうとする者があれば、その者を竜はことごとく殺してしまうのである。だから侏儒オイゲルはザイフリートにこの陰気な森からただちに立ち去ることを勧めるのであるが、しかし、今やキリスト教的騎士のザイフリートとしては引き下がるわけにはいかない。ましてや「神のあわれみがなければ、彼女は決して救出されない」(50,4) となれば、キリスト教的騎士としてのザイフリートとその哀れな乙女クリームヒルトとの結びつきはますます強くなるばかりである。否、それどころか、ザイフリートはその名前を聞くや否や、次のように、そのライン河畔の国王の娘を知っているとまで言い出すのである。

Da sprach der held Seyfride 》Die ist mir wol bekandt,
Wir warn eynander holde In jres vatters landt.《 (51,3-4)

すると英雄ザイフリートは言った。「彼女なら私はよく知っている。
私たちは彼女の父の国で互いに仲がよかったのだ。」

このザイフリートの言葉がでたらめな発言でもないということは、あとでザイフリートがクリームヒルトに出会った場面（後述144－5頁参照）からも明らかであるが、それにしてもいくつかの疑問を抱かせる。ここでは冒頭部分の第12詩節及び主要部分の第32詩節に関連づけて、ザイフリートはギービッヒ王に仕える (12) 使者として姫を捜しに出かけた一人の優れた勇士 (32) として考えるべきなのであろうか。いずれにしても作品全体は「色とりどりの雑多な素材をごちゃごちゃに寄せ集めたつぎはぎ細工」[17] であるかのような印象を与えずにはいない。しかし『ニーベルンゲンの歌』においても、例えば、グンテル王に伴ってイースラントへ向かうジーフリトは、

17) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 11.

他の伝説に基づいてすでにプリュンヒルトと知り合いであった（vgl. 331,4）ことを前提としていること等を考え合わせると、ここでも『不死身のザイフリート』の詩人はこのような矛盾には全く気を留めていないように思われる。否、それどころか、詩人は意識的に突然ここでザイフリートとクリームヒルトは旧知の間柄であったとすることによって、これから始まる乙女解放への原動力としてザイフリートのミンネ奉仕を際立たせている[18] とも言えるのである。「互いに仲がよかった」（eynander holde, 51,4）という旧知関係であったことによって乙女の解放行為にもより高い意味が与えられることになったのである。すなわち、この乙女救出は単なる弱者のための行為ではなく、ミンネを求めての行為ともなったのであり、ザイフリートは次のように自らの決意を表わすのである。

Do Seyfride der küne　　Die mär da recht vernam,
Seyn schwert stieß er in die erden　　Vnd zů dem stayne kam,
Darauff schwůr er drey ayde,　　Der außerwelte man,
Das er nicht kem von dannen,　　Die Junckfraw wolt er han.　　(52)

勇敢なザイフリートはその話をしかと聞くと、
彼の剣を地面に突き刺して、岩のところへ行った。
その上で彼、選び出された男は三つの誓いを立てて、
その乙女を手に入れるまではここを去りはしないことを誓った。

ザイフリートは今や「選び出された男」（52,3）であり、キリスト教的騎士として悪の象徴たる竜から乙女を救出するミンネの騎士なのである。この新しい結びつきによって『不死身のザイフリート』の主要部分における竜との戦いは、これまでのニーベルンゲン伝説における竜との戦いとは根本的に異なった新しい性格を持つに至ったのである。

2．巨人クペラーンとの戦い――ザイフリートとクリームヒルトの再会――

こうしてザイフリートは乙女救出のために悪竜と戦うことを決意したのであったが、しかし、その際ザイフリートが侏儒オイゲルから教えられたのはクペラーン（Kuperan）という名の巨人の棲家に通ずる道である。侏儒オイゲルによると、要するに、この陰険な森の中では巨人クペラーンが君臨し、彼が竜の岩を開ける鍵を持っている（59,1-3）ので、乙女救出のためにはまず最初に、その巨人と戦わねばならないというのである。この巨人との戦いは竜との戦いを引き延ばす結果となっているが、この挿入によって主要部分の本来の冒険である悪竜退治は冒険ロマー

18) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 98.

ン的な性格を帯びることとなったのである。

さて、これからザイフリートが戦うその巨人は「これまで見たこともないような恐ろしい男」(60,2-3) ではあったが、しかしザイフリートはうれしく思う (60,4) ほど自信にあふれている。オイゲルの案内で巨人の家の前に辿り着いて、おとなしく巨人に出て来るよう命じる (61) と、巨人は片手に一つの鋼鉄の棒を持って岩壁の中から跳び出して来て (62,1-2)、ザイフリートを威す (62,3—63,1) が、ザイフリートは自信にあふれ、しかも神を信じる英雄として次のように答える。

Do sprach der Held Seyfride　　》Gott ist zů hilff geporn,
Der wöll mir yetz verleyhen　　Seyn sterck vnd auch seyn macht,
Das du mir müssest geben　　Die Junckfraw so geschlacht.　　(63,2-3)

Darumb wir ymmer mere　　Vber dich schreyen mordt,
Das du in solch ellende　　Beschleust die Junckfraw dort
In diesem holen stayne　　Mit so grosser arbeyt,
Mer dann vier gantze Jare　　Gelegen in grossem layd.《　　(64)

すると英雄ザイフリートは言った。「神が助けてくれよう。
神がその強さとその力をも私に貸して下さるので、
お前はその高貴な生まれの乙女を私に渡さざるをえないだろう。

私たちはますますもってお前に死を呼びかけるが、
それもお前が見るも哀れなほどに乙女をそこに閉じ込めたからだ。
乙女はこの岩の洞穴の中で大変な難儀を強いられて、
四年以上もの間、ひどい苦しみにあっているのだ。」

ザイフリートは神を信じているばかりではなく、ザイフリートの言葉の中には乙女に対する優しい気持ちが感ぜられる。これに対して巨人は高慢な男として描かれている。巨人はザイフリートの言葉に怒り狂って丈夫な鉄棒を振り上げてザイフリートに襲いかかって来る (65,1-2) のである。こうしてザイフリートと巨人との間で激しい戦いが展開される (66—79) が、ついに巨人はザイフリートから十六箇所に深い傷を受けて (80,4)、命乞いをする (81—82)。ザイフリートは乙女救出の手助けするのを条件に巨人を生かしておく (83)。巨人との戦いはあくまでも乙女救出が目的なのである。

ところが、命を助けてもらった巨人はその好意に対して不実を働くことになる。すなわち、傷

の手当てが済んで、巨人の案内で岩壁の扉を調べることになったとき、巨人は背後からザイフリートに飛びかかった（87,4）のである。ザイフリートはその乱暴な一撃で倒れてしまい、鼻と口からは赤い血が流れ出た（88,4）。そこへすぐさまやって来て助けてくれたのが侏儒オイゲルである（89,2）。オイゲルは霧の頭巾（ein nebel kappen, 89,3）を取り出して、それをザイフリートにかぶせた。するとザイフリートの姿は巨人の目には見えなくなったのである。『ニーベルンゲンの歌』ではジーフリトは侏儒アルプリーヒから隠れ蓑を奪い取った（97,3）のに対して、この『不死身のザイフリート』においては全く逆に侏儒オイゲルがザイフリートに霧の頭巾をかぶせて手助けをしてやるのである。侏儒オイゲルの誠実はこの『不死身のザイフリート』では巨人の不誠実という根本的な性格特徴とコントラストをなしている[19]と言えよう。事実、巨人はテクストの至るところで「不実な男」（der vngetrewe, 85,4；86,1；87,2；87,4 u.a.）と表現されている。巨人のこの特性はすでにその名前に現われている。すなわち、》Kuperan《という名前は金属の「銅」（Kupfer）に派生するが、「銅」は表面的な輝きから人を騙して「金」を思い出させるので、中高ドイツ語の》kupfer《はしばしば比喩的に「不正で、間違ったもの」を意味している[20]のである。クペラーンは文字通りこの作品では不実な男として登場しているのであり、その特性はすぐあとの筋の展開においてもまた明らかとなるのである。

ともかくも不実な巨人クペラーンの不意打ちにあったザイフリートは、誠実な侏儒オイゲルの霧の頭巾によって窮地を脱したのである。草原で休息して再び正気を取り戻すと、侏儒オイゲルはザイフリートに、姫のことはあきらめて、このまま頭巾をかぶって立ち去るがよいと忠告するが、ザイフリートは反論して言う。

Do sprach der Held Seyfride 》Vnd das mag nicht geseyn.
Vnd het jch tausent leybe, So wiß die trewe meyn,
Die wölt jch alle wagen Durch die magdt wolgethan.
Jch wils noch baß versuchen, Wie es mir wöll ergan.《 (94)

英雄ザイフリートは言った。「それはとんでもないことです。
私の誠実を知っていてほしいが、私に千の命があったとしたら、
私はその美しい乙女のためにそれらすべての命を賭けるつもりです。
私に何が起ころうと、私はそれをなおいっそう試みるつもりです。」

19) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 136.
20) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 134. und auch Hendrik Willem Jan KROES: Der sagengeschichtliche Gehalt des Liedes vom Hürnen Sewfrid. Germanisch-Romanische Monatsschrift 39, 1958. S. 202f.

乙女救出のためにはすべてのものを犠牲にしてもよいというザイフリートの強い決意がこの言葉の中に窺えよう。ザイフリートはこう言って勇敢にもその頭巾を脱ぎ捨てる（95,1）や、手に剣を持って巨人に襲いかかり、巨人に八箇所も傷を負わせるのである。ザイフリートはこの不実な巨人を殺してしまいたいところであったが、ここで巨人を殺せば、「乙女のところに辿り着く道を知る者がいなくなる」（96,3-4）ので、その不実な男をまたもや生かしておいた（97,3）。ザイフリートの究極の目的が巨人を打ち負かすことではなく、あくまでも乙女救出にあることがここでも明らかである。しかもその場面で「英雄ザイフリートは、自分を乙女に駆り立てる大きな愛についていろいろと考えをめぐらせたのである」（Darumb der held Seyfrid／ Het vil manchen gedanck／ Wol von der grossen liebe,／ Die jn zur mayde zwangk. 97,1-2）と詩人自身によっても語られている。ザイフリートを今や動かしているものは乙女への愛であることが理解できよう。

ザイフリートはこうして巨人に自分の前を歩ませながら（97,4）、竜の岩に辿り着く（99）。巨人は鍵を手に取って地下の扉を開ける（99,3）。扉は地下八クラフターのところにあった（99,4）のである。ザイフリートは不実な男から素早く鍵を奪い取って、彼に前を歩かせる（100）。くたくたになるほど岩山を登る（101,1）と、そこには乙女が捕らえられていて、ザイフリートは乙女と再会することになるのである。再会の場面は次のように語られている。

Vnd do der Held Seyfride　　Ersach die maget reyn,
Do begundt sie seer waynen,　　Als wir noch hören jehen,
Sie sprach 》jch hab dich, Ritter,　　In meynes vatters hauß gesehen.《
(101,2-4)

Also sprach die Junckfrawe　　》Biß willkumm, Seyfrid, herre meyn.
Wie lebt meyn vatter vnd můter,　　Zů Wurms wol an dem Reyn,
Vnd meyn vil lieben brüder,　　Die drey Künig lobesan?
Das sag mir durch deyn trewe,　　Solt michs geniessen lan.《　(102)

英雄ザイフリートが清らかな乙女を見つけると、
彼女はひどく泣いたが、それはまだ私たちにも聞こえるほどである。
彼女は言った。「騎士殿、私はあなたに私の父の家でお会いしたことがあるわ。」

こうして乙女は言った。「ようこそ、あなた、ザイフリート殿。
私の父母はライン河畔のウォルムスでいかに暮らしていますか。
そして私の親愛なる兄弟たち、あっぱれな三人の国王はいかがですか。
あなたの誠実にかけてそれを話して下さい。私にそれを聞かせて下さい。」

この乙女の言葉によってザイフリートがかつてウォルムスに滞在し、乙女と知り合いであったことが明らかである。しかしここにおけるザイフリートが、冒頭部分の第12詩節及び主要部分の第32詩節に結びつけられて、乙女を捜すためにギービッヒ王によって派遣された使者であるのか否かは不明であると言わなければならない。なぜなら、上記のクリームヒルトの父母及び兄弟の安否の質問に対してザイフリートは次のように答えているからである。

Do sprach der Held Seyfride　》Schweyg, laß dein waynen seyn.
Du solt mit mir von hinnen,　Du schöne Junckfraw reyn,
Wan jch dir hilff gar balde　Von diser grossen not,
Oder jch můß sicherlichen　Darumb hie sterben todt.《　(103)

すると英雄ザイフリートは言った。「黙って、泣くのはよしなさい。
美しい清らかな乙女よ、私と一緒にここから出ましょう。
私があなたをすぐにこの大きな苦難から助け出してあげますから。
さもなくば、私はそのためにここで死ぬ覚悟です。」

ザイフリートは、すなわち、乙女の心配する父母及び兄弟の安否については何も答えずに、すぐさま救出の決意を述べているのである。今や筋の展開は乙女救出に集中しているためにその回答は詩人には不必要に思われたので省略されたのか、それとも意識的に詩人はその回答を削除したのかについては未解決のままにしておかざるをえない[21]。ザイフリートのウォルムス滞在に関していくつかの疑問を抱かせる場面ではあるが、ともかくもクリームヒルトはザイフリートの死の覚悟に対して感謝しつつも、竜の恐ろしさについてこう語る。

》Nun lon dir Got, Seyfride,　Du Ritter wolgethan.
Jch fürcht aber, du mögest　Dem Trachen nicht wider stan.
Es ist der grewlichst Teuffel,　Den jch han ye gesehen.
Vnd wirst du jn ansichtig,　Die warheyt můst du jehen.《　(104)

「ザイフリート殿、立派な騎士よ、神の報いがありますように。
でも私は、あなたが竜に太刀打ちできないのではないかと恐れます。

21) この作品を種本としてのちに生まれたと言われる民衆本『不死身のジークフリート』では、最初からジークフリート（ザイフリート）は乙女フローリグンダ（クリームヒルト）を救い出すために派遣されたギバルドゥス王（ギービッヒ王）の使者とされており、この再会の場面で、ジークフリートが四日前に出発したときには彼女の家族は皆元気であった旨のことを簡単に知らせている。（櫻井春隆訳：不死身のジークフリート「ドイツ民衆本の世界」国書刊行会1987年227頁参照）

竜は恐ろしい悪魔で、私も今までに見たことがないくらいです。
あなたも竜を見たら、それが本当だと分かりますわ。」

この乙女の言葉に対してザイフリートは、巨人の場合と同様に、竜をも恐れずにその自信のほどを明らかにする。

Do sprach der Held Seyfride　　》Er mag so scheutzlich nicht seyn.
Jch hab nicht gern verloren　　Die grossen arbeyt meyn.
Jch hab so seer gestritten　　Mit dem vngefügen man.
Vnd wenn er wer der Teuffel,　　So will ich jn bestan.《　　(105)

すると英雄ザイフリートは言った。「竜はそんなに恐ろしくはないでしょう。
私は私の大きな苦労を無駄にはしたくありません。
私は粗野な男を相手にとても多く戦ってきました。
彼が悪魔であろうと、私は彼に打ち勝ってみせます。」

ザイフリートの決意が固いことを見て取ったクリームヒルトは、その決意に感謝して彼を励ましながら、その「大変な苦労」(die groß arbeyt, 106,1) に対して、次のような約束をする。

》Nun lon dir Got, Seyfride,　　Du hast die groß arbeyt
Durch meynent willen erlitten　　Vnd durch mich angeleyt.
Vnd hilfft mir Got zů lande,　　Das wisse one won,
Des gib jch dir meyn trewe,　　Keyn andern für dich han.《　　(106)

「ザイフリート殿、あなたに神の報いがありますよう。あなたは
私のために大変な苦労をし、私のために苦しみをなめました。
しかと知っていてほしいのですが、神の助けで私が故郷へ帰れたら、
誰にも差し上げない真心を私はあなたに差し上げます。」

ここでクリームヒルトが約束している「真心」(meyn trewe, 106,4) とは、彼女が彼の妻になる心構えがあることを意味していることは言うまでもない。並々ならぬ労苦を自ら進んで引き受けることによって、その神の助けを信じている救出者は、乙女の確固たる誠実な愛をかち得る[22] こ

22) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 85.

とができるのである。『不死身のザイフリート』という作品は今や一種のミンネ・ロマーンであると言っても差し支えないであろう。一人の女性のために「大変な苦労」をし、「苦しみ」をなめてきたザイフリートの態度は、ミンネ騎士として模範的であり、騎士的婦人奉仕の観念に相応するものだからである。

このザイフリートのミンネ騎士としての特徴はすぐまた行われる三度目の巨人との戦いの際にもさらにもっと明らかなかたちをとって現われてくる。すなわち、クリエムヒルトと再会を果たしたザイフリートは、巨人クペラーンに案内されて立派な剣――伝統的な伝承においても重要な役割を果たしている名剣は、ここでは竜に打ち勝つことのできる唯一の剣（107,3-4）として取り入れられている――が隠されている箇所に近づくが、そこでまたもや巨人はザイフリートに背後から襲いかかって傷を負わせた（108,3）ので、両者の間で三度（みたび）激しい格闘が始まったのである。その場面は次のようにミンネ・ロマーン風に語られているのである。

Do begriffe er den Rysen,　Sich hůb ein ringen groß,
Das der Trachenstain erzittert.　Der junckfraw schreck was groß.
Sie waynt vnd wand ir hende,　Die zart Junckfraw reyn,
Sie sprach 》ach Got von hymel,　Stehe heut dem rechten bey! 《　(109)

》Vnd solt du vmb meynent willen　Deyn leib verloren han,
So můß jch an meym hertzen　Jämerlichen kummer han,
So wil jch mich verfallen　Von diser grossen not
Vber disen holen stayne,　Das jch gelige todt.　(110)

Darumb, du held Seyfride,　Bewar den deynen leib
Vnd denck an deyn arbeyte　Vnd an mich armes weib. 《
Do sprach der held Seyfride　》Du schöne magt vil her,
Jch traw mich zů erweren,　Sorg nur für mich nicht mer. 《　(111)

Sie rungen mit eynander,　Das sach das schöne weib.
Do můst der vngetrewe　Verlieren seynen leyb.
Seyfrid greyff jm in die wunden,　Dem vngefügen man,
Vnd zert jms von eynander;　Da mocht er nymmer stan.　(112)

そこで彼は巨人に組みつき、激しい格闘が始まった。
竜の岩は揺れ動いた。乙女の抱いた恐怖は大きかった。

彼女は泣き、手をもんだ。純粋で優しい姫は
言った。「ああ、天の神よ、今日は正しき人に味方して下さい！」

「そしてあなたが私のために命を失うことにでもなれば、
私は心に痛ましい苦しみを抱かずにはいられないでしょう。
それならば私は、この洞穴の岩の上で
この大きな苦しみで倒れて、死んでしまいたいわ。

ですから、勇士ザイフリート殿、あなたの身体をお守り下さい。
そしてあなたの苦労と哀れな女性の私のことを考えて下さい。」
すると英雄ザイフリートは言った。「立派で美しい乙女よ、
私はしかと私の身を守りますから、私のことではもう心配しないで下さい。」

彼らは互いに格闘し、そのさまを美しい女性が見ていた。
そこで不実な男は命を失わねばならなくなった。
ザイフリートはその粗暴な男の傷をつかんで、
バラバラに引き裂いた。その男はもう立っていられなかった。

美しい乙女の言葉が正しき勇士に力を与えている点などにおいてはミンネ・ロマーンの特徴を読み取ることができよう。美しい乙女のミンネが戦っている勇士ザイフリートに力を与えて、彼はついに巨人を打ち負かしてしまうのである。巨人は草原の上にひざまずいてまたもや命乞いをする（113）が、今や乙女との再会を果たすことができた（114,2）ザイフリートは、もはやその巨人の不誠実な行為を許すことはできずに、その巨人の腕を取って岩から投げ捨てる（114,3）。すると巨人はこなごなになったので、乙女は喜ぶ（114,4）。勝利を収めたザイフリートは、宮廷的なミンネ騎士のように、「礼儀正しく」（gezogenliche, 115,2）乙女の前に歩み出て、やさしい言葉で乙女を慰める（115,3－116,2）。細かな点に至るまでザイフリートは今やミンネ騎士の観念に相応しいことが明らかであろう。しかし、この乙女をこの岩から完全に解放するためには、ザイフリートは最後の難関としてまだなお恐ろしい悪魔のような竜と戦わなければならないのである。

3．竜との戦い――ザイフリートとクリームヒルトの結婚――

こうして巨人を打ち倒したザイフリートは、侏儒オイゲルの計らいで山中より食事が運ばれて、ひとまずこの竜の岩山で食事をすることになった（118,3－119,2）。食卓には多くの立派な侏儒たちがザイフリートに仕え（119,3）、乙女もまた彼の世話をしている（119,4）。ところが、彼ら

が食べ始めないうちに、すべての山が崩れ落ちるかのようなものすごい音が聞こえてきた（120,1-2)。食卓についていた侏儒たちは急いで逃げて行った（122,4)。彼らは竜が近づいて来たことに気づいたからである。竜は口から火炎を吐き出していたが、それは槍三本分もあるほどであった（123,3-4)。この恐ろしい竜とザイフリートはいよいよこれから戦わなければならないのであるが、この主要部分における悪竜退治がニーベルンゲン伝説の伝統的な特徴から大きく逸脱していることは、上でもすでに指摘してきたように、この竜がもともとは美しい人間であった（vgl. 125,3-4）ということからも一目瞭然である。なるほど人間が竜に変身するというモチーフは例えば北欧の『歌謡エッダ』中の『レギンの歌』と『ファーヴニルの歌』並びに『ヴォルスンガ・サガ』においても現われている[23]が、しかしそこでは竜との戦いは財宝獲得と結びついており、竜に変身して財宝を守っているファーヴニルを倒すことによってシグルズは財宝の所有者となるのである。それに対してこの『不死身のザイフリート』では、一人の美しい若者がある女性の呪いによって強制的に竜の姿に変えられている（125,3-4）のである。そしてこの竜は五年後に魔法が解けて人間に戻ったら、ギービッヒ王の娘クリームヒルトを妻にしようと思って、彼女を誘拐したのである。従って、ここではザイフリートと竜との戦いは、財宝ではなく、一人の乙女の愛をめぐっての戦いとなっている点で、従来のニーベルンゲン伝説とは赴きを異にするのである。だから竜は、自分が長いこと養った乙女をザイフリートがウォルムスに連れ戻そうとしていることに気がつくと、それに対して大層怒りを示す（127,1-3）のであり、吐き出す火炎で岩山をまるごと焼き尽くそうとする（127,4）のである。ここで展開される竜との戦いはこのようにその乙女の愛をめぐっての戦いという新しいモチーフとなっているのである。

ところが、この竜との戦いの中で従来の財宝獲得のモチーフはすっかり削除されたわけではない。新しいエピソードとしてわずかながらこの場面に挿入されているのである。すなわち、このザイフリートと竜との戦いの凄まじさに山が崩れ落ちるのではないかと恐れたニープリンクの二人の息子たち――彼らはオイゲルの兄弟であった――は、彼らの父親の遺した財宝を山中より運び出させて、竜の岩の洞穴へ隠しておいたのである。火を吐く竜と戦っていたザイフリートは、竜のものすごい熱さの火炎を避けてその洞穴に逃げ込んだところ、そこでその財宝を見つけたのである。ザイフリートは、この財宝は竜がこの場所に集めたものだと思った（140,4）が、しかし「財宝は彼にはどうでもよかった」(Der schatz was jm vnmere. 141,1）と詩人自身によっても語られている。ザイフリートにとって乙女救出がまず何よりも重要なことなのである。ニープリンクの財宝はこのように『不死身のザイフリート』では伝統的な特徴とは異なった方法で竜との戦いの中へ取り入れられているのである。

そのあと竜が六十匹の有毒の小竜を連れて来た場面も伝統的な伝承には見出されない新しい筋

23）谷口幸男訳：エッダ――古代北欧歌謡集　新潮社1973年　133－143頁参照。
菅原邦城訳・解説：ゲルマン北欧の英雄伝説――ヴォルスンガ・サガ　東海大学出版会1979年36－58頁参照。

の一つであると考えられるが、この新しい挿入場面でもザイフリートは自信たっぷりに、またもや神への信仰を見せて次のように言うのである。

》Nun hab jch ye gehöret《, Sprach Seyfrid hochgeporn,
》Wer sich an Got hin liesse, Der ward doch nie verlorn.
Müß wir denn beyde sterben, So sey es Got geklagt,
Das ich mich deyn an neme, Du außerwelte magdt.《 (142)

「私は聞いたことがありますが」、高貴な生まれのザイフリートが言った。
「神に身をゆだねる者は、決して滅びることはありません。
私たち二人とも死ななければならないなら、あなた、選び抜かれた乙女よ、
私があなたのお世話を引き受けたことを、神に嘆くことにいたそう。」

ザイフリートは有毒の竜を恐れるクリームヒルトのために戦うことを明らかにしているのである。こうして英雄ザイフリートは怒って剣をつかんで岩山に登って行く（143,1-2）と、小さな竜たちはたちまち落ちてしまって、もと来た道を戻って飛んで行った。しかし、年老いた竜だけはとどまり、ザイフリートを苦しめる（144,1)。こうして再度ザイフリートと年老いた竜との間で激しい戦いが始まったのである。竜はザイフリートを突き倒し、彼をその尻尾で巻きつけて、岩山から突き落とそうとする。ところが、ザイフリートはその竜の巻きつけていた尻尾から飛び出して、ものすごく大きな力で竜に襲いかかる。このザイフリートの一撃や竜自らが吐き出す火炎によって、竜の角質の皮膚はついに柔らかくなって流れ出してくる。ここにも伝統的な伝承に基づく角質化のモチーフがわずかに認められるが、しかしここではそれは違ったふうに取り入れられている。すなわち、その柔らかくなった竜の角をめがけてザイフリートが立派な剣を振りかざすと、竜は真っ二つに切り裂かれてしまったのである。竜の身体の半分は岩山から落ちてこなごなになったが、片方の半分の身体はザイフリートがすぐあとから投げ捨ててしまった。これによって竜との戦いは、伝統的なニーベルンゲン伝説と同じように、ザイフリートの勝利に終わったのであるが、この主要部分におけるザイフリートの勝利は角質化の身体及び両肩間の急所に関する伝統的な特徴には結びつけられていないことが明らかである。ザイフリートは冒頭部分での角質化を踏まえて、この主要部分では初めからすでに角質の身体となっているのであろうか。ところが、先に繰り広げられた巨人との戦いではザイフリートは巨人に二度も傷つけられた（vgl. 88,4；108,3）ことが語られているので、ここでも何とも説明しがたい矛盾を感ぜずにはいられないが、それはともかくこの主要部分における竜との戦いは、これまで述べてきたように、乙女救出という新しいモチーフに結びついているのであり、ここでは伝統的な伝承とは違った別の新しい伝承が取り入れられていることが明らかである。

次の場面では、従って、身体の角質化でもなく、財宝獲得でもなく、新しいモチーフであるザイフリートと乙女の間の愛の合一が展開されているのである。しかもその愛の合一は二人とも互いに失神することによって高められている。すなわち、竜を打ち倒したザイフリートではあったが、彼は非常な熱さのために倒れて失神してしまう。「彼の顔色は青ざめ、彼の口は石炭のように黒かった」(Seyn farb was jm entwichen,／ Kol schwartz was jm sein mundt. 149,4) と語られているが、この有様を見て乙女も失神してしまったのである。ザイフリートが長い間倒れて横になっていたあと、やがて再び生気を取り戻すと、倒れている乙女を見出すのであり、その場面は次のように語られている。

Do sach er sie dort ligen　　So jämmerlich für todt.
Seyfrid sprach 》Got von hymel,　　O wee meyner grossen not! 《　(150,3-4)

Er legt sich an jr seyten　　Vnd sprach 》Got müß erbarm,
Sol ich dich todt heym füren? 《　　Er legt sie an seyn arm.　(151,1-2)

すると彼は彼女がそこに死んだように痛ましく倒れているのを見た。
ザイフリートは言った。「天の神よ、ああ、私の大きな苦労も水の泡なのか！」

彼は彼女の傍らにすわって、言った。「神もあわれみ給え。
私は死んだあなたを連れ帰らなければならないのか？」彼は彼女を腕に抱いた。

竜との戦いの目的があくまでも乙女救出であっただけに、乙女の失神を目にしたザイフリートの嘆きはそれだけ一層大きいのである。ここでまたもや筋の展開に関与してくるのが侏儒オイゲルである。侏儒オイゲルはそこへやって来て、乙女の口に薬草を与える (152,1) と、彼女はすぐに起き上がって正気に戻った (152,2) のである。乙女はザイフリートに礼を述べ (152,3)、彼をやさしく抱いて、彼に口づけをする (152,4)。騎士的冒険ロマーンにふさわしい結末であり、伝統的な竜退治とは異なった結末であることが容易に理解できよう。

さらにこの作品では悪竜退治の物語は乙女救出と同時に、侏儒一族の解放とも結びついていることが明らかである。すなわち、先程乙女に薬草を与えた侏儒オイゲルは、すぐそのあと英雄ザイフリートに向かって次のように言うのである。

Do sprach zum held Seyfride　　Eugel, das edel Zwerg
》Kuperan, der falsch Ryse,　　Bezwang den vnsern berg,
Darin wol tausent Zwerge　　Müsten jm seyn vnderthan
Vnd zinßten vnser eygen land　　Dem vngetrewen man.　(153)

Nun habt jr vns erlöset Vnd hie gemachet frey,
Des wöll wir euch gern dienen, Als vil als vnser sey,
Vnd will euch heym beleyten, Euch vnd die maget feyn.
Jch weyß euch weg vnd steyge Biß gen Wurms an den Reyn.《 (154)

そこで英雄ザイフリートに向かって気高い侏儒オイゲルが言った。
「邪悪な巨人クペラーンが我々の山を占領してしまい、
その中で千人の侏儒が彼に従わねばならず、
貢物として我々の国をその不実な男に差し出さねばならなかったのですが、

今や君が我々を解放し、ここで自由にしてくれました。
それゆえ、我々は生きている限り、君に喜んで仕えましょう。
そして君と立派な乙女が帰国するのに伴って参りましょう。
私はライン河畔のウォルムスまでの道筋を知っているのです。」

ここでは侏儒一族の解放は、なるほど悪竜との戦いではなく、巨人クペラーンとの戦いに結びつけられているが、しかし上で述べてきたように、この主要部分では巨人クペラーンとの戦いは悪竜退治の一部、否、悪竜退治を成就するためにはどうしても克服しておかねばならない冒険の一つとされているのである。悪竜退治によってザイフリートは侏儒一族をも解放すると同時に、彼らの服従をも手に入れる結果となったと考えてよいであろう。まさにこのように一つの行為が幾重もの意味を持っているのは冒険ロマーンに特有の特徴である。悪竜退治によって、ザイフリートは乙女の救出者であるばかりではなく、侏儒一族の救出者でもあるのであり、今やザイフリートは侏儒一族から「名高き国王」(Edler Künig hochgenant, 158,2) とまで呼ばれているほどである。このようにこの侏儒一族解放の点でも伝統的なニーベルンゲン伝承とは異なるものなのである。

こうして侏儒一族の奉仕を得て、山中で食事とワインで丁重なもてなしを受けたザイフリートと乙女は、立派な国王オイゲルとその二人の兄弟 ——— 彼らもオイゲルと同様に国王であり (156,1-2)、因みに、彼らの父ニーベリンゲは苦しみのあまり死んでいた (156,4) ——— に別れを告げてウォルムスへと向かう。感謝の気持ちから侏儒たちは、途中で災いが起こらないように、一千名がザイフリートと乙女に随行することを申し出る (158,3-4) が、ザイフリートはそれを断わり、その代わりにただ一人帰る道を心得ているオイゲルだけを従える。そしてこの侏儒オイゲルの随行はザイフリートの死の予言と結びついているのであるが、このザイフリートの死の予言も伝統的な伝承とは全く異なる点である。すなわち、侏儒オイゲルが早朝に星とそのシグナルを観察していた姿を目にしていたザイフリートは、自分と妻がその後どうなるのか、その妻を

どのくらい長く自分のそばにおいていられるのか（160,3-4）、オイゲルの身につけている占星術で占ってほしいと申し出たのに対して、侏儒オイゲルは未来を占って次のように答えるのである。

Do sprach das Zwerge Eugel　　》Das wil jch dir veriehen,
Du hast sie nur acht Jare,　　Das hab jch wol gesehen,
So wirdt dir dann dein leybe　　So mörderlich genummen,
So gar on alle schulde　　Da vmb dein leben kummen.　　(161)

So wirdt deyn todt dann rechen　　Deyn wunder schönes weib.
Darumb so wirdt verlieren　　Manch held den seynen leib,
Das nyndert mer keyn helde　　Auff erden lebendig bleybt.
Wo lebt ye Held auff erden,　　Der also ist beweybt?《　　(162)

そこで侏儒オイゲルは言った。「それを言ってあげよう。
私にはよく分かっているが、君は妻と八年しか過ごせないだろう。
君はその後、暗殺によって命を失うのだ。
全く何の罪もなしに君の命は失われることになるのだ。

その後、君の非常に美しい妻が君の暗殺の復讐をするだろう。
そのために多くの英雄たちがその命を失い、
もはやいかなる英雄もこの世に生き残ることはあるまい。
このような妻を持った英雄がこの世でどこにいるであろうか。」

ザイフリートの暗殺は、他のニーベルンゲン伝説においてのように、この作品でも逃れられない宿命であることが明らかである。ここではしかし「何の罪もない」暗殺として説明されることによって伝統的な伝承とは区別される。伝統的な伝承ではこのザイフリートの暗殺に強く結びついているのが、ブリュンヒルトに対する欺きと同時に財宝獲得なのであるが、この『不死身のザイフリート』ではブリュンヒルトに関するエピソードは現われないし、また財宝獲得も違った方法で取り入れられている。ザイフリートは要するに「何の罪もなしに」暗殺によって命を失うのであり、この第161詩節4行目における「罪なし」の強調はこの作品の主要部分におけるザイフリートの救出者としての肯定的な英雄像に相応するものである。従って、その後のクリームヒルトの復讐もここでは肯定的に捉えられている。復讐のために「多くの英雄たちがその命を失い、もはやいかなる英雄もこの世に生き残ることはあるまい」（162,2-3）という英雄たち全滅の描写も、そのあとに続く「このような妻を持った英雄がこの世でどこにいるであろうか」（162,4）という

妻を賞賛する言葉によって、『ニーベルンゲンの歌』におけるような悲愴感を感じさせはしない。ザイフリートとしても、暗殺後そのように復讐される（163,1-2）ので、それに満足してもはや誰によって暗殺されるのかについては質問しないのである。さらに侏儒オイゲルは「ザイフリートの美しい妻もまた戦死を遂げるだろう」（163,4）と予言し、このことによって、この場面はなるほど『ニーベルンゲンの歌』に近づけられているのであるが、しかし、細かな点では伝統的な伝承とはちょうど裏返しのかたちで取り入れられているのである。

この侏儒オイゲルの予言はさらに次に展開される財宝放棄をも動機づけているが、この財宝放棄についても伝統的な伝承とは裏返しの方法で取り入れられていることが明らかである。すなわち、予言を聞き終えたザイフリートは侏儒オイゲルに別れを告げて、彼を故国へと帰らせたが、そのときザイフリートが思い出したのはあの岩山に残してきた財宝であった（167,3-4）。ところが、その財宝はこの作品の主要部分では違った方法で取り入れられている。財宝はもともとは侏儒一族の所有物なのであるが、まずザイフリートは財宝の持ち主について次のように考えるのである。

Nun hat er zwen gedancken:　　Den ein auff Kuperan,
Den andern auff den wurme,　　Welcher den schatz het gelan.
Er meynt, jn het gesamlet　　Der wurm nach menschen witz,
Wenn er würd zů eym menschen,　　Thet er den schatz besitz.　　(165)

Er sprach 》sol jch mit note　　Den stayn gewunnen han,
Was jch dann drinnen funde,　　Das erbt von recht mich an.《
Er randt vnd holt den schatze,　　Er vnd sein schönes weyb,
Er lůd jn auff seyn Rosse,　　Das er vor jm her treyb.　　(166)

財宝を残したのは、クペラーンであるか、
または竜のどちらかだと彼は両方の考えを抱いていたが、
それは竜が人間の知恵に従って集めたもので、
竜が人間に戻ったとき、その財宝を所有するのだと思うに至った。

彼は言った。「私が苦労の末、あの岩を征服したのだから、
その中で私が見つけたものは、当然私が受け継ぐべきものであろう。」
彼とその美しい女性は、財宝を持ち出した。
彼は自分の馬に財宝を積んで、それを追い立てて行った。

『不死身のザイフリート』におけるザイフリートの財宝獲得は、『ニーベルンゲンの歌』においてのように二人のニーベルンゲン相続者の財産争い（vgl. 88－98）によっては動機づけられていない。ここでは竜との戦いの外的あらすじ状況から根拠づけられているだけであり、ザイフリートは財宝を偶然見つけ、乙女救出のために竜を倒すことによって付随的にその財宝の所有者となっただけなのである。従って、財宝欲望という伝統的なモチーフは、この作品の主要部分では物語の筋を動かす役割を演じていない。否、それどころか、ザイフリートはその後財宝をライン河に沈めてしまうのであり、その場面は次のように語られている。

Do er kam an den Reyne,　　Do dacht er in seym můt
》Leb jch so kurtze zeyte,　　Was soll mir dann das gůt?
Vnd sollen alle Recken　　Vmb mich verloren seyn,
Dem solt dann dises gůte?《　　Vnd schüt das in den Reyn.　　(167)

ライン河畔にやって来ると、彼は心の中で考えた。
「私が短い命であるならば、この財宝は私には何になるであろうか。
すべての騎士が私のために命を失うのであれば、
この財宝は誰のものになるのだろうか。」そして財宝をライン河へ沈めた。

このように『不死身のザイフリート』においては財宝をライン河に沈めるのは、『ニーベルンゲンの歌』においてのようにハーゲンではなく、ザイフリート自身である。しかもその予告された死のずっと以前に沈めておくのである。財宝はこの作品の主要部分では、冒頭部分とは全く逆の方法で取り入れられていることが理解できよう。財宝はこの主要部分では、竜との戦いの場面でもそうであったように、ザイフリートにとってはどうでもよいもの（vgl. 141,1）なのである。ザイフリートはライン河を越える際に、侏儒一族の財宝が人間の手に入ることを拒否してしまうのであり、財宝の呪いを人間社会に持ち込むことを断ち切ってしまうこの財宝放棄は肯定的なザイフリート像の描写に役立っていると言えよう。こうしてウォルムスの街に入ると、気高いザイフリートは皆から盛大な歓迎を受けて、クリームヒルトと結婚式を挙げるのである。

以上のように見てくると、この主要部分におけるザイフリートの冒険はことごとくこれまでの伝統とは根本的に異なった新しい様相を呈していることが理解できよう。ここではザイフリートは、乙女の生活秩序を乱す悪魔のような巨人及び竜に対して戦いを挑むキリスト教的騎士として登場し、その困難な冒険を見事に克服することによってその報酬として乙女の愛を獲得するとともに、侏儒一族の誠実な奉仕をもかち得るのである。自らを危険に晒してのこのザイフリートの戦いによって再び自由を取り戻すことができた侏儒たちは、救済者ザイフリートを「名高き国王」（158,2）だと呼んでおり、またウォルムスの人々もクリームヒルトの救出者ザイフリートを

「この世でどんな国王も称えられたことがないくらい」(Als kein Kayser auff erden／Deß gleych geehret nit. 170,2) の敬意をもって盛大に出迎えたのである。ザイフリートは今やある共同体の保護の責任を受ける能力があることを証明したのであり、これらの描写はまさに後期中世の冒険的英雄叙事詩の描写方法に相応するものである。その意味において『不死身のザイフリート』の主要部分は古い伝統的なニーベルンゲン伝承とは裏返しのかたちで展開された新しい後期中世的な冒険ロマーンであると言うことができるのである。

Ⅲ. 結末部分 (173－179詩節) におけるザイフリート像

こうしてザイフリートとクリームヒルトとの結婚によってこの作品のあらすじは冒険的ロマーンにふさわしい結末に辿り着いたのであるが、そのあとに続けて7詩節が付け加えられている。この結末部分 (173－179) は簡潔で、出来事をただほのめかすだけの語り方法で語られているという点で、主要部分の叙事詩的な広い語り方法に相応するというよりは、むしろ冒頭部分の描写方法に相応するものである[24]。しかし内容的には主要部分に続いており、独立したものと考えるよりは主要部分を締め括る補足的結末と考えた方がよいであろう。冒頭部分が主要部分のいわば「プロローグ」の役目を果たしていたならば、この結末部分は主要部分のいわば「エピローグ」の役割を果たしているのである。従って、この結末部分の最初の詩節においてはザイフリートは、主要部分における乙女救出及びそれに伴う侏儒一族の解放という彼の偉業を踏まえて、今や共同社会に責任のある理想の支配者としてほめ称えられているのである。

Seyfrid gab solch geleyte　　Vnd stercket das gericht.
Het eyner Gold getragen,　　Er dorfft sich fürchten nicht,
Also mit grosser stercke　　Er alle ding bestelt.　　(173,1-3)

ザイフリートはそのように国を保護し、法律を強化した。
そのため誰かが黄金を所有しても、その者は心配する必要はなかった。
このように大きな力によって彼はすべてのことを処理したのである。

この詩節における「大きな力」(grosser stercke, 173,3) とは、冒頭部分における腕白者の「強さ」(starck, 2,1) でもなく、主要部分の悪竜退治に耐えられうる英雄としての「ものすごい力」(grosser stercke, 33,3) でもなく、理想的な支配者としての「力」を意味していることは明らかである。ザイフリートはもはや腕白者でもなく、また冒険好きの若い王子でもなく、理想の支配者なのである。冒頭部分の顧問官たちが期待していたように、ザイフリートは冒険の旅を克服す

24) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 174.

ることによって、「おとなしく」(3,3) なり、かつまた「大変勇敢な英雄」(3,4) となったのである。このザイフリートの成長過程こそこの作品におけるテーマ、つまりは詩人の最大の関心事であったのであり、この点では冒頭部分と主要部分及び結末部分は互いに結びついて一つに統一されていると言えるのである。

ところが、こうして冒険を克服することによって初めて辿り着くことのできたこの支配者としての理想的な英雄像がザイフリート暗殺のきっかけとなる。伝統的な伝承ではジークフリート暗殺は、上でも述べたように、ブリュンヒルトの憎しみ及び財宝獲得に結びつけられているのであるが、ここでは主要部分の内容に合わせて支配者ザイフリートに対する国王兄弟たちの嫉妬だけに限定されている。この結末部分では、理想的な支配者としてのザイフリート像と著しいコントラストをなすように、ウォルムスの国王たちの嫉妬が描かれているのである。上に引用したザイフリートの描写に続けてまずはギュンターの嫉妬が次のように語られている。

》Das wöll der Teuffel《 ,sprach Günther　》Das man so werdt hie held (173,4)

Für ander Held so küne,　Die hie nun seind geschmecht,
Die also gůt von Adel,　Als er ist von geschlecht
Er tregt an jm all tage　Die wappen vnd die ring,
Damit helt er die Helden　Inn disem land gering.《　(174)

「なんてことだ」ギュンターが言った。「ここでその英雄が、

我ら他の勇敢な英雄たちをさしおいて尊敬されているとは。我らは彼と同じくらい、
高貴な生まれでありながら、今やここでさげすまされているのだ。
彼は毎日紋章と指環を身につけている。
それでもって彼はこの国の英雄たちを見下しているのだ。」

ギュンターの言葉の中には暗示的に、王国の支配権は合法的な王家の一員にあるのであって、姻戚関係による他国の英雄にあるのではないという理解が表現されている[25]。このことを具体的に言葉に表わしているのが次に口を開くハーゲンである。

Do sprach der grymmig Hagen　》Er ist der schwager meyn.
Will er die land regieren　Herniden an dem Reyn,

25) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 181.

So sol er eben schawen, Das ers nicht vbersech,
Wann jch war ye der erste, Vnd der ein solches rech.《 (175)

そこで獰猛なハーゲンが言った。「彼は私の義理の弟だ。
彼がこのライン河畔で国を支配するつもりならば、
彼に思い知らせてやろう。私が第一人者であるからには、
そのようなことには仕返しをしてやることを見過ごさぬように。」

『ティードレクス・サガ』や『ニーベルンゲンの歌』においてと同じように「獰猛な」(grymmig) という形容詞が特別につけられているハーゲンは、義理の弟がこのラインの王国を支配することに対しては断固とした仕返しをする心構えがあることをほのめかしているのである。三人目のギールノートもハーゲンと同じ意味のことを次のように言っている。

Do sprach Gyrnot der degen 》Meyn schwager der Seyfrid,
Jch geb auß meyner hande Das aller beste glid,
Das vnser vatter Gybich Het hie den meynen můt,
So sag jch, hie Seyfride Thet jm die leng keyn gůt.《 (176)

すると勇士ギールノートが言った。「私の義弟ザイフリートめ、
私は最愛のものを手放しているのだ。
私たちの父ギービッヒがここで私の気持ちを理解してくれるなら、
ここではずっとこれからザイフリートのためにはならないことを言っておこう。」

4行目の叙述はザイフリート暗殺のほのめかしとして理解してもよいであろう。要するに、この作品においては国王兄弟三人は、父王ギービッヒから国王としての権力をまだ受け継いでいないので、姻戚関係を結んだザイフリートが彼らの国で力を誇示していることに嫉妬深い敵意を強調しているのである。この三人の嫉妬深い敵意がすぐさまザイフリート暗殺へと発展してゆくのである。

このようにザイフリート暗殺の動機は確かにこの作品では、伝統的な伝承とは異なって、ブリュンヒルトへの欺きや財宝獲得に関連づけられてはいないが、しかし表面的な点では伝統的な伝承に相応していることが明らかである。特に暗殺相談におけるギュンター、ハーゲン及びギールノートという三人の人物情勢は『ティードレクス・サガ』におけるジグルト暗殺相談の人物情勢に相応する。すなわち、そこではヘグニ(ハーゲン)が国王兄弟の一人とされているばかりではなく、グンナル、ヘグニ及びゲールノーツの三人がブリュンヒルトの恥辱を聞いてジグルト暗

殺を企むのである[26]。ここではとにかく伝統的な伝説素材に基づいていることが理解できるのである。暗殺相談に続くザイフリート暗殺の場面でも、ちょうど『ニーベルンゲンの歌』と同じように、国王三人兄弟のうちの二人によって計画され、実行される[27]のであり、その場面は次のように語られている。

Also die drey jung Künge　　Seyfriden trůgen haß,
Biß das die zwar geschwigen,　　Vollendten beyde das,
Das Seyfrid todt gelage.　　Ob eynem prunnen kalt
Erstach jn der grymmig Hagen　　Dort auff dem Otten waldt　　(177)

Zwischen den seynen schultern,　　Vnd da er fleyschend was,
Do er sich kült im prunnen　　Mit mund vnd auch mit naß.
Sie warn der Ritterschaffte　　Geloffen in ein gsprech,
Do wurd es Hagen befolhen,　　Das er Seyfrid erstech.　　(178)

このように三人の若い国王はザイフリートに対して敵意を抱いた。
彼らは沈黙を守ったが、ついに二人がそれを実行し、
ザイフリートは死ぬこととなった。あそこオーデンの森の、
ある冷たい泉のほとりで、獰猛なハーゲンが

彼の両肩の間を突き刺したが、そこだけは傷つく箇所だったのである。
それは彼が泉に口と鼻を浸して涼をとっていたときのことであった。
騎士たちは話し合っていたので、
ハーゲンがザイフリートを刺すように命じられたのである。

ザイフリートは、古い伝統的なニーベルンゲン伝説においてのように、森の中で泉の水を飲んでいるときに暗殺される[28]のであり、しかもハーゲンがその際突き刺す箇所はあのザイフリートの両肩の間、すなわち、角質の皮膚となっていない唯一の傷つく急所なのである。「ハーゲンが命

26) Vgl. Fine ERICHSEN: a. a. O., S. 371-377.及び拙著：前掲書45-47頁参照。
27)『ニーベルンゲンの歌』においてジーフリト暗殺の実行がグンテルとハゲネの二人によるものであることは、13詩節のクリエムヒルトの鷹の夢における二羽の鷲によっても暗示されているし、また暗殺後の1046詩節におけるクリエムヒルトの言葉からも容易に理解することができよう。
28) ザイフリート暗殺の森がオーデンの森となっていることから、この作品は『ニーベルンゲンの歌』の改作であるliet本に関連づけられるが、そのなかでも特に後期中世の『ニーベルンゲンの歌』改作kに影響されたのではないかと推測されている。(Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 184f.)

じられた」(178,4) という細かな点ではなるほど『ニーベルンゲンの歌』とは異なるが、しかし、『不死身のザイフリート』はこの暗殺場面ではとにかく古い伝説素材に基づいており、この両肩の間の傷つく箇所のモチーフによって結末部分は冒頭部分の描写 (11,1-2) に結びついているとも言えるのである。

従って、ここで言えることは、この結末部分では再び伝統的な伝承に基づいて語られているということである。この結末部分におけるザイフリートは、主要部分においてそうであった (vgl. 88,4 ; 108,3) ように容易に剣で傷つけられうる英雄であるのではなく、またもや不死身の英雄——ただし、両肩の間に唯一の傷つく急所があるという——に戻っているのである。ところが、『不死身のザイフリート』の詩人はこのような伝統的な英雄ザイフリートの暗殺に関わる物語にはあまり興味を抱いてはいなかったように思われる。なぜなら、この作品は次のように締め括られているからである。

Die drey brüder Krimhilde　　Wer weyter hören wöll,
So wil jch jm hie weysen,　　Wo er das finden söl.
Der leß Seyfrides hochzeyt,　　So wird er des bericht,
Wie es die acht jar gienge.　　Hie hat ein end das dicht.　　(179)

クリームヒルトの三人兄弟について、さらに聞きたい人は、
それがどこで見つけられるか、ここで私がお教えいたそう。
ザイフリートの結婚をお読み下さい。そうすれば、八年がどのように過ぎたか、
よく分かるでしょう。ともかくここでこの話は終わることといたそう。

この詩人の締め括りの言葉によれば、『ザイフリートの結婚』という作品は、ザイフリートがクリームヒルトと結婚してからその妻の三人の兄弟によって暗殺されるまでの八年間の出来事を詳しく語っているという。この『ザイフリートの結婚』という作品が十五世紀に由来する『ニーベルンゲンの歌』写本kをほのめかしているか否か[29] は、もはやここでは問題ではない。いずれにせよ、この結末部分における他の作品の指摘は、『不死身のザイフリート』の詩人はもはやザイフリートの死には興味がないということを表わしているのである。『ニーベルンゲンの歌』の詩人——あるいはここで言う『ザイフリートの結婚』の詩人——はザイフリートの悲劇とそれに基づくクリームヒルトの復讐に特別な関心があるのに対して、『不死身のザイフリート』の詩人はただザイフリートのすばらしき冒険にのみ関心があるのである。この主人公のすばらしき冒険ゆえに、この作品は前口上で作者自身が言っているように「すばらしき歌」(ein schönes Lied)

29) Vgl. Hermann SCHNEIDER: Germanische Heldensage. I.Band. Walter de Gruyter Berlin und Leipzig 1928. S. 120. und auch H. W. J. KROES: a. a. O., S. 194. wie V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 189f.

なのであり、その意味において後期中世的な冒険ロマーンであると言えるのである。そしてまさにこのような冒険的ロマーンで描かれたすばらしき英雄像は、中世後期と近世初期という改革と救済を必要とする危機時代と変革時代には人々によって模範的人物として喜んで迎え入れられていったのである。

結び

以上のように見てくると、『不死身のザイフリート』の核心をなすのは主要部分（16—172）であり、その前後にプロローグとしての冒頭部分（1—15）とエピローグとしての結末部分（173—179）が置かれて一種の枠を作っていることが窺い知れよう。『不死身のザイフリート』の詩人あるいは改作者はこの枠において伝統的な古いザイフリート像を紹介することによって、主要部分において詩人自らの新しいザイフリート像を展開させることに成功したのである。主要部分においては、従って、同じモチーフ特徴が冒頭部分とはことごとく裏返しのかたちで展開されているのである。

まず冒頭部分ではザイフリートは手に負えない「腕白者」として登場し、故国からの旅立ちはその勝手気儘な振舞いによって動機づけられ、その腕白の本性は鍛冶屋での奉公の際にも否定的に現われている。これに対して主要部分においてはそのような描写は現われず、ただ第47詩節の突然の古い伝説素材の挿入によって、ザイフリートはある陰気な森の中に捨てられた孤児であり、大人になるまである親方に育てられたとあるだけである。いずれにしてもザイフリートは強い力の持ち主であることに変わりはないが、その強い力の本質的な相違は悪竜退治において明らかとなる。すなわち、冒頭部分における竜との戦いは自らの命を守るための戦いに過ぎないが、主要部分での竜との戦いはギービッヒ王の姫を救出するという他人のための戦いとなっているのである。主要部分においては竜は、要するに、人間の至福を脅かす悪魔の竜として描かれており、ザイフリートはこれに立ち向かうキリスト教的救出者なのである。否、それどころか、ザイフリートはさらにクリームヒルトと旧知関係であったことによって、ミンネを求める騎士でもあり、竜との戦いはミンネを求めての戦いでもあるのである。このミンネ・ロマーンの傾向を強めているのが、冒頭部分では取り扱われていない巨人との戦いである。乙女のところに辿り着くためにはまずこの巨人と戦わねばならないのであるが、この巨人との戦い及びそれに続く悪竜との戦いに際してザイフリートの行動は至るところでミンネとキリスト教的神の信仰によって決定づけられている。冒頭部分においてザイフリートの外面的な強さが強調されているならば、主要部分ではそれとコントラストをなすように英雄の内面的な強さが強調されているのである[30]。この信仰心とミンネに基づく勇気によってザイフリートは、巨人及び竜に打ち勝つことができたのであるが、このザイフリートの勝利は乙女救出を意味しているばかりか、同時に侏儒一族の救出にも結びつ

30) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 211.

いている。侏儒一族は今やザイフリートを「名高き国王」(Edler Künig hochgenant, 158,2) と呼んでほめ称えているほどであり、さらにウォルムスに到着すると、ザイフリートは「この世でどんな国王も称えられたことがないくらい」(Als kein Kayser auff erden／Deß gleych geehret nit. 170,2)、皆から盛大な歓迎を受け、めでたくクリームヒルトと結婚式を挙げるのである。ウォルムスの街は多くの客人たちで溢れ、喜びが沸き起こった (171) と語られているが、ザイフリートは今やギービッヒ王の姫及び侏儒一族の救出者であるにとどまらず、ウォルムスの街の守護者にふさわしい地位をも手に入れたと言えよう。ところが、まさにこうして辿り着いた支配者としての理想像がザイフリート暗殺のきっかけとなる。冒頭部分ではなるほど暗殺についてはっきりとは語られていないが、財宝獲得によるものであることがほのめかされていることは容易に読み取ることができる。それに対して結末部分――主要部分の補足的結末――では、ザイフリート暗殺は財宝には一切関係づけられていない。それどころか、財宝は主要部分の最後の方でザイフリートによってライン河に沈められるほどであり、主要部分及び結末部分では財宝は物語の筋を動かす役割を果たしてはいないのである。この点でも主要部分及び結末部分は冒頭部分とは全くの裏返しの関係にあることが明らかである。

従って、ここではっきりと主張することができるのは、『不死身のザイフリート』の主要部分は伝統的なニーベルンゲン伝説に基づく冒頭部分とは意識的に対立して作られたということである。別の言い方をすれば、『不死身のザイフリート』においては英雄主義の社会的な使命が課せられているのである[31]。すなわち、冒頭部分で否定的な方法で描写されている英雄主義は、主要部分においては社会的に行動する英雄の新しい種類の理想へと移されており[32]、結末部分では平和と法律を安全にする強い支配者像が描写されているのである。この冒頭部分の「腕白者」から主要部分の「救出者」を経て結末部分の「支配者」へと発展しているところにこの作品のテーマがあるのであり、冒頭部分で述べられている先見の明のある顧問官たちの忠告（3）がこの作品を方向づけていると言える。その限りにおいて冒頭部分と主要部分及び結末部分は一つに統一されていると考えることもできるのである。確かに全体的に矛盾が多く、作品全体は締まりのない構成になっていることは否めないが、しかし、詩人はそのような矛盾にはあまり頓着していないように思われる。否、それどころか、詩人は意識的に矛盾を目立たせることによって初めて主要部分において自らの物語世界を展開させることに成功したとも言える。すなわち、詩人は自らの新しいキリスト教的・騎士的救出者としてのザイフリート像を強調するために、主要部分と結末部分において特に古い伝説素材を用いたのであり、まさにこの古い素材と新しい素材の複合性とその緊張関係にこの作品の特質があるのである。このように『不死身のザイフリート』は、伝統的な伝説素材を保存しながら、その核心部分では新しいキリスト教的救出者としてのザイフリートの「すばらしき歌」(ein schönes Lied) を展開させているのであり、その意味において後期中世的な冒険ロマーンであると言うことができるのである。

31) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 225.
32) Vgl. V. -J. KREYHER: a. a. O., S. 225.